

フィールドワークの知を磨くライブ授業の試み

岩田香織^{*1}・稗田里香^{*1}・木村勇介^{*2}・森 祥子^{*2}

I. ライブ授業の試み

ヒューマンケアサービスの実践では、対人援助職（サービス提供側）に専門知識、技術に基づく専門性が要請され、専門職者としての立場から対象者（サービス利用者）と関係を構築することが援助の基盤となる。対人援助職者の養成にあたっては、学生に対し、ヒューマンケアサービスの実態を踏まえたうえで、必要な知識と技術をさせ、体験を通して専門性を涵養することが大きな目的となる。

しかし、ヒューマンケアサービスの実態、実践の〈現実〉を、直接的に把握できる形で体験できることは少ない。特に学内の授業においては、講義、演習等いずれの形式をとろうとも、一定の限界があることを考慮しなければならない。「教室」という空間が、ヒューマンケアサービスの実践の場から物理的にも、質的にも距離をもったものであることから当然のことといえる。

同時にこのことは、多様で複雑な要因が絡み合い、混沌とした様相を呈することの多い実践の場を科学的、客観的にとらえ、学びと考察を深めるために有利な点でもある。

そこで、授業を通してヒューマンケアサービス実践を学ぶ利点を生かしつつ、その実践の〈現実〉にできるだけ迫り、立ち入って捉えるためには、工夫を凝らす必要がある。本研究では、その方法の試みを提案するものである。ここではその試みを「ライブ授業」という名称を用いて展開することとする。

「ライブ授業」とは、授業展開にあたって、できる限りヒューマンケアサービス実践の現場に近づき、あるいはその実践の一環をそのままに教室に持ち込んで、そこでのやりとりや取り組みを積み重ね、授業目的の達成に至るような「流れ」を創造する授業形態を意味すると（仮に）位置付ける。すなわち、「ライブ（live）」を可能な限り重要視することが身上となる。現に今存在し生きている現場を題材にし、実践の利用者・援助者、授業の

学生・教員の生き生きとした交流が生み出すものを重視しつつ、その積み重ねが一定の成果に達するような経験やあらたな実践を創出するよう考慮され工夫されたプログラムを用いることとなる。

II. 授業の目的としての「フィールドワークの知」を磨く

「ライブ授業」の授業目標は何か。大きな到達目的としては本授業の体験を通して「フィールドワークの知を磨く」ことである。

「フィールドワーク」をここでは「教室や実験室外で、現に展開している作業や仕事、生活をその現地に赴いて実地的に体験し実証的に考察する一連の取り組み」と位置付ける。

本授業では、基本的には学内授業として教室での授業展開になるため、「現地に赴く」趣旨を最大限取り入れるために、考慮されたプログラムを用いることが必須となる。今後のライブ授業の提案のためには、本研究で実施するプログラムの効果測定も一つの研究課題となろう。

「ライブ」であり、「フィールドワーク」を基本的な要件とするのは、次の2点を狙いとするためである。

①ヒューマンケアサービス実践の〈現実〉、リアリティをできるだけ〈生〉の形で体験し、そこでのやり取りが次回の授業展開を生み出していくプロセスを重視し、その体験から何を学ぶか主体的に捉える。

②実践の場に身を置き、対象者と直接的に関わるときの相手との交流を体験し、自らの役割や立場に気づく。

総じていえば、関係の相互性を体験し、プログラムを遂行しようという取り組みを通して「フィールドワークの知」あるいは「実践の知」を磨くことを目指すこととなる。

この場合の「関係の相互性」は授業展開自体が、積み重ねの中である程度流動的に創出されるものを重視することから、ライブ授業の場で生じる事象と独立的に捉えることはできない。つまり「教員→学生」の教授関係や「援助者→利用者」の援助関係といった、一方方向に単

*1 東海大学健康科学部社会福祉学科

*2 東海大学健康科学部看護学科

純化され自律的にモデル化された関係とはならないことが前提となる。特に、授業に用いられるプログラムと深く関与する授業に持ち込まれる（あるいは授業が出向く）実践の場の援助者及び利用者は、学生や教員にとって、実践の〈現実〉をもたらす提供者であり、プログラムに取り組む協働者であり、支援を構築する対象者であり、すでに実践で執り行われている「知」を教えてくれる教師でもある。

こうした実践の場およびそこでの関係（援助者と利用者）を対象とするとき、学生と教員は、働きかけるとともに、働きかけられるという体験を積むこととなる。問われるのは、こうした関係を構築するなかで、対人援助職者として（学生に焦点を当てるならば対人援助職を目指す者、対人援助を学ぶ者として）、どう関われるか、どのような役割を担うことができるか、どのように「知」を磨くことができるか、というある種のパフォーマンスである。援助者養成の本旨を外れないように考慮すべく、利用者の前にあってどのようにふるまえるか、どのような知恵を提案することができるかは、実践において恒常的かつライブな課題であり、このことから外れないように授業が展開するように注意が払われる。

Ⅲ. 研究目的・方法

上記の趣旨で看護・福祉領域の支援者と対象者のパートナーシップの基盤を考察する機会とするために、看護福祉パートナーシップ実践法 B（以下、実践法 B とする）においてライブ授業を実施した。実践法 B には、看護・福祉領域の対象者として、A 地域活動支援センターの利用者（以下、利用者とする）15 名程度、およびセンターの職員 2 名が参加した。

本研究は、実践法 B に参加した学生と利用者の体験や学びを明らかにし、今後の実践法 B のあり方を検討することを目的とする。

研究方法は主に次の 2 点に着目して分析・考察を行う。

- ①実践法 B での学生のレポート、授業評価を、学生の体験や学びに着目して分析する。
- ②実践法 B に参加した利用者にフォーカスグループインタビューを行い、同意を得て録音し、逐語録を作成する。逐語録は、利用者の体験や学びに着目して分析する。

Ⅳ. 健康科学部における看護福祉特講研究の経緯とプログラム検討

今回ライブ授業を行った実践法 B に先立ち、看護・福祉学科ともに履修可能な選択科目として看護福祉特講

が 2010 年度まで開講されていた。佐藤・竹之内・西原らは、この看護福祉特講における学生の学習成果を分析、検討し、「利用者主体」「利用者尊重」という対人援助職としての価値観を共有し、専門職連携への“芽生え”を体験したという成果を確認した。また今後の課題として有意義な学びが多いが授業計画の検討・修正が必要であると指摘している（2010）。

これをふまえ、本授業における位置づけを再検討し、プログラム内容を検討した。

ライブ授業のプログラム概要は以下のとおりである。

① A センターで行われている作業内容を知る。

② 「プログラム ともに取り組む」

（学生と利用者がともに、A センターで作成・販売している「はたきづくり」に取り組み、相互理解と交流を図る）

③ 「プログラム ともに創る」

（学生と利用者が、ともに新たな交流の場を創る。今回はクリスマス会を企画し、ゲーム、座談会、合唱を行った。）

④ プログラムの成果、授業目標及び目的の総括

V. 結果

学生のレポートについては、現在分析中である。

ライブ授業に参加した利用者 8 名に対して、フォーカスグループインタビュー（30 分）を実施した。インタビュー内容は、①ライブ授業印象、②ライブ授業感想（positive）、③プログラム評価、④学生印象、⑤学生の対応（positive）、⑥学生への期待、⑦看護師・ソーシャルワーカーへの期待、⑧大学生についての理解・イメージの変化、⑨自分の将来、⑩今後の構想の 76 の文脈単位に分析された。

【考察】

学生の授業評価、利用者のインタビュー結果より、評価は概ねポジティブなものであった。プログラム効果を直ちに明確化するには限界があるが、「ライブ授業」の継続的試行を支持するものであった。

また、今回の試みは S センターにおける支援者・メンバー間の関係性および日頃の活動、メンバーの障害状態等の安定性が前提となっている。同時に看護学科・社会福祉学科学生の学修の特徴も本授業の臨む態度・取り組みに影響している。その点では、プログラム内容的確性、授業効果等を直ちに明確化するには限界があり、ライブ授業の試みを積み重ね実証的に検討を継続する必要があるものと考えられる。